

平成28年度（第60回）
岩手県教育研究発表会発表資料

幼児教育／幼小接続

豊かな心の育成にむけた保育のあり方
～「森の保育園」の活動から～

平成29年2月9日
住田町教育委員会
住田町立世田米保育園
泉 田 蘭 子

豊かな心の育成にむけた保育のあり方 ～「森の保育園」の活動から～

住田町立世田米保育園
保育士 泉田 蘭子

1 主題設定理由

近年、子どもを取り巻く環境は目まぐるしく変化している。子どもの遊びの場の環境においても、安全に遊べる場所も減少し、さらに自然の中で遊ぶことが現代社会において可能であるのか疑問にも感じる。このような状況からも保育園に期待するところが大きいと考える。

本園でも、面積の90%を占める豊かな森林資源に恵まれた町に住んでいながら、自然体験をほとんどしないという子が多くなっている。間接体験の機会が増え、実体験が不足していることから、自然やさまざまな物があってもじっくりと触れたり、その特性や意味について、友だちや保育者と感じたことや考えたことを伝え合い、探したり試したりする姿が少なく、子どもの成長にとってあまり望ましいとはいえない。だからこそ、自然や季節変化に直接かかわることが重要であると考え。

本町では、各年代に応じた森林環境教育の事業が展開されており、保育園でも「森の保育園」として、すべての子どもに豊かな自然活動・体験の場がある。

そこで、本研究では「森の保育園」での直接体験の積み重ねと、豊かな心の育成に、どのような関連があるのか考えていきたいと考え、本主題を設定した。

2 研究のねらい

「森の保育園」での自然体験活動を通して、子どもたちの豊かな心を育成するための保育のあり方を探る。

3 研究の仮説

- (1) 「森の保育園」の活動の中で、直接体験を積み重ねることにより、豊かな心が育まれるであろう。
- (2) 保育者自身が自然に対して感じる心を磨き、環境への意識をもって自然に触れ合うことを充実させ、保育に活かすことで子どもたちの育ちにつながっていくであろう。

4 研究の内容と方法

(1) 豊かな心を育てるための自然活動

- ア. 「森の保育園」活動による自然体験
- イ. 日常保育のなかでの活動（泥あそび、散歩、栽培や飼育活動）

(2) 主題の共通理解の促進

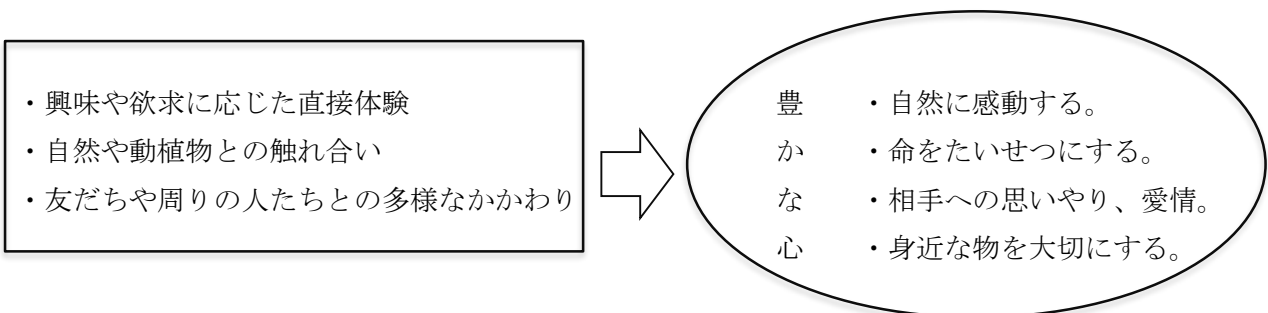
- ア. 文献研究、研修会、講演会など
- イ. 豊かな心の明確化

5 研究実践

(1) 研究主題の基本的な考え方

豊かな心とは

幼児期に自然環境とのかかわりを通して、直接体験を積み重ね、感動したり、疑問を持ったりなど周りの人や友だちと共感することによって豊かな心が育つものとする。



～「森の保育園」にかかわって育つ姿～

- ・自然の不思議さ、美しさ、大きさに感動する姿
- ・自然現象に興味を持ち、試してみようとする姿
- ・（どうにもならない）自然の偉大さを感じている姿
- ・生き物の世話を通して、愛着や思いやりを持とうとする姿
- ・探究心や好奇心の芽生え
- ・相手の気持ちに気づいたり、思いやったりしている姿

(2) 実現するための手立て

- ・自然体験によって起こる心の動きを保育者が受け止め共感する。
- ・保育者自身が自然に興味を持ち、自然と触れ合うことに心地よさを感じ、楽しんでいる姿を子どもたちに見せていく。
- ・研修会や地域の方々から学び得た自然との出会いを大切にし、意識を高めていく。
- ・研修を充実させたり、関係機関との連携を図ったりすることにより、保育者自身も草花や生き物に対する接し方など子どものモデルとしてふさわしい言動になるよう心掛ける。
- ・自然との直接体験を積み重ねられるような四季折々の環境を構成する。

事例1 「森の保育園」の活動から ～四季折々の直接体験の積み重ね～

本園は、山々に囲まれているものの、近くに自然体験できる場が少なく、園庭の自然も限られている。その現状のなかで四季が感じられ、自然の素晴らしさがつまった種山での「森の保育園」に子どもたちは魅力を感じている。そこで、種山の直接体験の積み重ねを働きかけることで、豊かな心が育まれるのではないかと考えた。

資料1. 「森の保育園」実施計画

| | |
|-----------|--|
| 実施期日 | 平成27年5月29日(金) |
| ねらい | <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな生き物、草花との出会いを楽しむ。 ・種山に生息する生き物や草花を見つけ、触ってみたりする中で、自然との楽しい出会いを経験する。 ・自然の中でのびのびと体を動かし、お腹を空かせることでお米のおいしさを十分に味わう。 |
| 活動内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・種山の自然にふれて遊ぶ ・予想される活動(あそび) 森の散策、自由あそび、絵本の読み聞かせ 他 |
| 参加人数 | 年長児22人、職員(世保4名・教委1名・林政課1人・森の案内人2名・住田高ボランティア8名) |
| 日程 | 世保発9:00～種山イベント広場10:00～猿山の岩10:15～水辺の広場(昼食・トイレ)～せせらぎの広場(散策)～種山発14:00～世保着14:40 |
| 援助・配慮事項 | <ul style="list-style-type: none"> ・道路状態や種山の施設を事前に調べる。(下見 5/25) ・子どもたちの健康状態をチェックする。・緊急時の連絡方法について明確にする。 ・衣服の調節をして歩きやすいようにする。(長靴、長袖、長ズボン着用 ※半袖シャツ) ・ゆったりと自然の不思議さや変化等に関心が向けられるよう、保育者も感動を言葉にして、子どもたちに伝えていく。 |
| 携行品 | <ul style="list-style-type: none"> ・おにぎり(お米のおいしさを味わうために、おにぎりだけで) ・水又はお茶(ペットボトルも可) ・汚したときの着替え一式(ビニール袋に入れて) ・ビニール袋・ハンカチ・ちり紙・雨かっぱ ・背中に背負うリュックサック・おしぼり |
| 服装 | 園児服・長袖の服(下に半袖着用)・長ズボン・長めの靴下・長靴(黒っぽい服装は避ける) |
| 雨天の場合 | <p>「雨の種山を楽しもう」 場所…遊林ランドまたは大股公民館</p> <p>(小雨の場合) (大雨の場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・せせらぎの広場を散策 ・草花を摘んでくる(種山) ・ゲーム(森の案内人さん) ・絵本の読み聞かせ(高校生) ・バスで種山を散策 ・ゲーム(森の案内人さん) ・パネルシアターなど ・絵本の読み聞かせ(高校生) |
| 緊急時の連絡・対応 | <ul style="list-style-type: none"> ・緊急車両①：留実子先生+林政課 ・蜂に刺された場合：ほとんどの病院で対応可能。住田診療センターが無難。 症状が重い場合は、すぐに119番。 ・へびに噛まれた場合：すぐに119番。対応方法等、適切な指示をしてくれる。 ドクターヘリの場合あり。 |
| 事前指導 | <ul style="list-style-type: none"> ・宮沢賢治の作品にふれる(紙芝居、うた「牧歌」など) ・安全指導 ・散歩を通して、「この色は何色かな?」「ここは大きな木があるね」などの言葉を掛け、気持ちを自然に向けるようにする。子どもの目の高さで見えるものだけでなく姿勢を低くするなどして、子どもの気づきを促し、援助していく。 |

<「森の保育園」の活動>

住田町の「種山」の大自然を舞台に、通常の保育園活動では味わえない保育の活動の場として四季折々の「風を感じ」「草花の匂いを嗅ぎ」「鳥の声を聞き」「樹木の鼓動を感じる」など、自然との一体感の中で心と体を育めるよう、春夏秋冬、年に4回実施。

| 期 | ねらい | 活動内容 | 子どものつぶやき |
|---|--|---|---|
| 春 | <p>○種山に生息する生き物や草花を見つけ、さわってみたりするなかで、自然との出会いを経験する。</p> <p>○春の種山のさまざまな生き物や草花の発見を楽しむ</p> | <p>○春の種山の自然にふれて遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森の散策、猿山の岩登り 自由遊び ・高校生ボランティアによる絵本の読み聞かせ など | <p>～エゾハルゼミとの出会い～</p> <p>「この鳴き声は…？なんだろう？」「そっと、しずかに」</p> <p>「にんじやみたいになれば、つかまえられるかも」</p> <p>「せんせい、セミにげちゃった」</p> <p>「次は、つかまえるぞー！」</p>  |
| 夏 | <p>○「みる・きく・さわる・かぐ」などのさまざまな感覚を使って、種山を楽しみ、おもしろさを体験する。</p> <p>○夏の種山のさまざまな生き物や草花との出会いを楽しむ。</p> | <p>○夏の種山の自然にふれて遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物見山を散策する（ネイチャーゲーム） ・自然とふれながら、英語で遊ぶ ・風の又三郎のお話 ・自由遊び など | <p>～物見山のせかい～</p> <p>「ヤッホー！わあーやまびこになった」</p> <p>「（ピューと風が吹く）又三郎がきたー！」</p> <p>「巨人の足跡のうえ、あったかい！きもちがいいね！」</p>  |
| 秋 | <p>○種山の秋の自然にふれて、木の実や草花、生き物などに興味や関心を持つ。</p> <p>○友だちなどとの関わりのなかで、自然へのおもしろさを一緒に共有する楽しさを感じる。</p> | <p>○秋の種山の自然にふれて遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森の散策、木の実、葉っぱ拾い ・森の植物を使ってのお弁当作り ・葉っぱの魚屋さん など  | <p>～秋の味覚満載！お弁当づくり～</p> <p>「ここはどんぐりご飯にして、マユミはデザートにする！」</p> <p>「ヤマボウシはどこに置こうかな？」</p> <p>「どんぐりのぼうしに、くろもちの実をつめて」</p>  |
| 冬 | <p>○冬の種山を体いっぱいを感じ、自然のなかでの雪遊びを存分に楽しむ。</p>  | <p>○冬の自然にふれて遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雪遊び ・そり滑り ・かんじき体験 ・アイス作り など | <p>～冬のもりのゆき～</p> <p>「キヤー！！すごいスピード。もう一回！もういっかい！」</p> <p>「かまくらきもちいいね」</p> <p>「本当にアイスできるのかな？」</p>  |

<考察>

- ・普段の遊びのなかでも、風が吹くと静かに耳を澄ませてみたり、空を見上げて雲の形の変化に気づいたり「今日は恐竜の形だ」と楽しむようになった。
- ・種山の自然との関わりから「なんでだろう？」ということばが増えてきた。遊びの中で、不思議に思ったこと、「なぜ？」と知りたくなったことに出会うと、図鑑で調べたり、友だちや保育者に聞いたりする姿が日常的に見られるようになった。
- ・自然での直接体験を通し、その中で感じた面白さから、自分で解決していこうという積極性に繋がりが、さらに、園児の持つ観察力や集中力の高まりにも繋がった。
- ・PDCAサイクルが出来たことで、活動を見直すヒントやアイディアを得ることが出来た。また、その事が自分自身の学びとなり保育者の資質向上につながった。

事例2 子どもたちの成長の姿 ～生き物の世話を通して～

子どもたちは、初めての「春の森の保育園」にどきどき・わくわくし、年長児だけが四季を通していける憧れの場所「種山」をととても楽しみにしている。ゆったりとした時間のなかで種山の自然を散策し、最後の地点であるせせらぎの広場でオタマジャクシを発見し、保育園に持ち帰る。この機会を通して、生き物について、「飼育の仕方」「成長していく様子」「命の大切さ」を知ってもらいたいという願いを持って、子どもたちと一緒にオタマジャクシを飼育することにした。

<生き物に直接かかわる体験>

| 子どもの姿 | ◎保育者の援助 ○保育者の読み取り ☆願い |
|--|---|
| <p>オタマジャクシを発見。</p> <p>子 「すごいね」「いっぱいいるね」</p> <p>子 「さわってみたい」</p> <p>オタマジャクシ捕まえに夢中。</p> <p>子 「そういえば、ばななぐみ（年中児）のとき育てたよね」</p> <p>子 「ねえ、また育てたいね」</p> <p>子 「せんせい！保育園に持って帰って育てたい」</p> <p>保 「みんなで大切に育てられるかな？」</p> <p>子 「うん！」</p> <p>オタマジャクシが何を食べるのか興味津々。</p> <p>子 「オタマジャクシは、煮干しやご飯粒食べてる」</p> <p>子 「そうなんだ～。」「たべてる、たべてる！」</p> <p>毎日のように飼育ケースを眺める。</p> <p>子 「このオタマジャクシ大きいね」</p> <p>子 「あっ、こっちは泳ぐのが早い！」</p> <p>子 「あしが生えてきたよ」「ほんとだ！」</p> <p>保育者がオタマジャクシの飼育ケースを洗い、水を交換している周りにA児が寄ってくる。</p> <p>A 「せんせい、なにをしているの？」</p> <p>保 「オタマジャクシのお家をきれいにして、水を新しいものに替えているの」</p> <p>A 「ぼくもやってみよう」</p> <p>オタマジャクシを飼育ケースからバケツに移す</p> <p>子 「わたしもやってみよう」</p> <p>交代でオタマジャクシを新しい水の中に移す。</p> <p>子 「あっそうだ、種山みたいにオタマジャクシのお家を作ってあげよう」</p> | <p>☆自然のなかでの不思議さやおもしろさを感じてほしい。</p> <p>◎子どもが発した言葉や不思議を感じる心を大切にする。</p> <p>○どんな感触なのか知りたいんだね。</p> <p>◎子どもたちと一緒にになり、本気でオタマジャクシを捕まえる。</p> <p>○年中でのカエルにならないで死んでしまったこと思い出したんだ。</p> <p>○今度こそカエルに変化させたい気持ちがあるんだ。</p> <p>☆自分たちで世話をしなければ生きていけないということを子どもたちに実感してほしい。</p> <p>◎子どもたちが観察しやすい透明の飼育ケースを用意する。</p> <p>◎図鑑や関連する絵本を手に取りやすい場所に用意する。</p> <p>○いろいろな図鑑を見て、調べたんだね。</p> <p>◎変化に気づいた子どものつぶやきを受け止めてみんなに伝え関心を持てるようにしていく。</p> <p>☆生き物の存在を身近に感じ、その動きや臭いを肌で感じてほしい。</p> <p>◎保育者とともに、エサを与えて世話をしながら、興味関心を深める。</p> <p>◎一人ひとりの感動や発見を受け止め、共感する。</p> <p>○オタマジャクシの動きをよく見ているね。たくさん発見すごいね。</p> <p>☆保育者が手本となり、飼育の仕方を見せながら、必要なことを伝えていく。</p> <p>○興味を持ってくれたんだ。嬉しい！</p> <p>○オタマジャクシの世話、率先して行ってくれているね。</p> <p>○種山の池よく覚えていたね。</p> |

| | |
|---|---|
| <p>周りの子どもたちも賛同し、園庭中から石を集めだす。</p> <p>子 「この石どうかな」「いいね！」</p> <p>子 「もっと必要だね」</p> <p>子 「ここを丸く囲ったらたのしいかもよ」</p> <p>子 「そうだね」</p> <p>子 「種山みたいになったね」</p> <p>オタマジャクシがカエルになる。</p> <p>飼育ケースを洗う時、逃げようとしたり、餌を食べなかったりしている様子があり、話し合う。</p> <p>保 「このままじゃカエルが弱ってしまうかも」 「みんなはどうしたらいいと思う？」</p> <p>子 「食べられるエサを捕まえたらいんじゃない」</p> <p>子 「でも小さいバッタ食べてないよね」</p> <p>子 「近くの田んぼに逃がしたら」</p> <p>子 「田んぼじゃなくて、種山から持ってきたんだから種山に帰したらいいんじゃない」</p> <p>子 「そうしよう！夏の森の保育園もあるしね」</p> <p>保 「そうだね、じゃあ、みんなで種山にかえそうね」</p> | <p>◎子どもの「やりたい」「こうしたい」という意思を尊重し、実現できるように援助する。</p> <p>◎子どもたちが自分の力でやり遂げた達成感を味わえるようにする。</p> <p>◎みんなで大切に育てたからカエルになったよ！よかったね。</p> <p>◎今の状況を伝え、カエルがどのようにしたらいいのか話し合う場を設ける。</p> <p>◎調べたんだね。食べそうな虫、捕まえたんだね。</p> <p>◎食べなくて、残念だったね。</p> <p>◎子どもたちの優しさが嬉しい。</p> <p>◎夏の森の保育園も楽しみにしているんだね。</p> |
|---|---|

<考察>

- ・当番活動ごとにエサやりをしていくことで、オタマジャクシの存在を身近に感じ、その動きや臭いを肌で感じることで「生きている」「成長している」ということを実感していた。また、その姿を保育者や友だちと喜んだりすることで生き物への愛着がより増している。
- ・生き物に関わることで親しみを持ち、喜んだり、「なぜだろう」と不思議に思ったりすることが日常的になった。そのような思いや感動を保育者や友だちと一緒に味わうことで感動はより確かなものになり、新しい好奇心の芽生えとなり、探究してみたいくなる気持ちにつながった。
- ・自然のなかで出会った生き物の命に触れる経験を通して、友だちの思いや良さに目を向けることができ、意識して関わられるようになった。
- ・これまで見られなかった友だち同士の結びつきが見られたり、興味の方向が一致して、一緒に遊び進めるうちに、新たなつながりが生まれてきたりなど、友だちとの関係に広がりが見られた。また、いろいろな友だちとの関わりの中で、自分の思いやイメージを出し合い、友だちと一緒に遊び進めるようになってきた。
- ・オタマジャクシの飼育を通して、さまざまな生き物にも興味関心を持つようになった。カタツムリを飼育した場面では、カタツムリの卵を発見、喜ぶと同時に「土の中にかくれて産んだってことは、そっとしてほしいんだ」と感じ、友だちに話す姿が見られた。飼育を通して、気持ちを感じ取ったり親しみを持ったりし、接することができている。

事例3 「森の保育園」研修会での澤口氏との出会いから ～保育者の気づきと心の変化～

保育者の以前の姿

「森の保育園」を実施するにあたり、活動を詰め込んだり、スケジュール通りにしなくてはと時間を気にしながらの行動になっていた。また、事故が起こらないようにと安全面に重点を置きすぎてしまい、保育者にとってその場所に立ち止って自然の姿に心を動かす余裕はなく、保育者自身が自然を楽しむとは、ほど遠いものとなっていた。

澤口たまみ氏との出会い

絵本作家澤口たまみ氏と「森の保育園」に同行する中で、澤口氏が子どもたちと一緒に自然の草花や生き物にかかわる場面を目にする機会があった。そこでは、子どもが草花や生き物に強く注目している場面や、子どもが自ら発見したことを声に出している場面があると、それを見逃さず、子どもに寄り添って関わっている姿を目にした。その姿から、これまで「安全に、時間通りに活動を進めなくては」ということばかり考えて、子どもたちの姿を丁寧に見ていなかったことに気づき、「これまでの自分の関わり方ではいけないと」感じた。また、子どもたちに対して、あれこれと活動を詰め過ぎず、何もしない自由な時間が重要であることや、子どもたちに対して「教える」とは思わず、子どもたちから「教えられる」気持ちに発想を変えてみるのが大切だということに気づいた。

保育者の心の変化

澤口氏との出会いがきっかけとなり、自然へと目を向けることが多くなった。身近な草花の変化に気づいたり、空を流れる雲を見ながら、風の向きや速さを気にしたりと、自然のことがもっと知りたくなった。本町が実施している森のマイスター講座を通して、自然体験を存分に味わい、自然への意識を高めていく。

自然への意識をもって子どもたちと関わる

自然への知識を教えるのではなく、子どもの気づきを大切に、共感する気持ちを持って子どもたちと関わり、実践することにした。

森の散策中、様々な木があるなかで一つの木の葉の裏に何かを発見し、足を止めるB児。

B 「せんせい！葉っぱのうらに白いあわみたいのがくっついているよ」

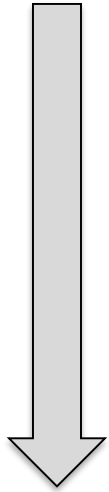
保 「あっ、本当だ！Bちゃんすごい！よく気が付いたね」

B 「これって、なんだろう？！」

保 「うーん、なんだろうね。やわらかそうだね」

B 「なんだかぷくぷくしてるよね」

保 「本当だ！そうだね」



Bはじっと葉っぱを見つめながら考えているが、答えがでない。
B 「あっ、そうだ。森の案内人さんだったらわかるかも！！」
保 「そうかもね！案内人さんに聞きに行ってみようか」
森の案内人さんと呼ばれに走り、葉っぱの近くに連れてくる。
森案「おっ、よく気が付いたね！これはあわふきむしといってこの泡のなかに虫がいるんだよ」
B 「あわふきむしっていう虫なんだー。おもしろいね！！」
保 「おもしろい発見したね、Bちゃん」
B 「そうだ！みんなにも教えよう。おーい！みんな、みてみて！！」

子どもの変化

泡のなかに虫がいるという神秘的な出会い、その姿に自分の目や言葉などさまざまな感覚を使って感動的な場面がそこに展開しているという理解が、自然とのかかわりを見守る保育者には必要である。すぐに何かを教えようとしたり、客観的に子どもが取り組むことを眺めていたりするのではなく、子どもと共に答えを探していく大人のまじめさに、子どもは好奇心と探究心を支えられているのではないかと感じた。

子どもとの驚きや発見した体験を共感し、認めていくことで、子どもの自然の素晴らしさに感動することや子どもの気づきに共鳴していくことで探究心が広がってきたと感じる。また、普段の保育の場面でも、自信を持って行動するようになり、臆せずに友だちや周りの人たちと関わろうとするようになった。



不思議！！「これ、なんだろう！」



「すごい！よく見つけたね」

<考察>

- ・スケジュールを詰め込み過ぎず、種山本来のゆったりと落ち着いた雰囲気大切に、子どもがのびのびと自然体験に夢中になることが大切であると再確認した。
- ・「森の保育園」でかかわる大人が子どもたちと一緒に、自然からのたくさんの不思議に触れ、感じることを楽しむ存在であることを大事にする。そういった思いをもってかかわることで、子どもたちは種山での驚きや感激の体験が、「もっと知りたい」という子どもの好奇心や探究心へとつながっていくのだと再認識した。

6 研究の成果と課題

《成果》

- ・「森の保育園」の活動の中で、子どもたちは様々な感動を味わったり、命の大切さを知ったり、思考力が培われ、とことん楽しむ子どもたちの姿から自然を感じる力が豊かになっていると感じられる。
- ・「森の保育園」での経験から、日々の自然との出会いの中でも、興味・関心を持って主体的に関わっている姿がみられた。それらに関わることで親しみや喜び、「なぜだろう」と不思議に思ったりする。そのような思いや感動を保育者や友だち、周りの人と一緒に味わうことで感動はより確かなものとなり、新しい好奇心への芽生え、探究したくなる気持ちにつながったと思う。
- ・研修することにより、保育者自身の自然への意識が変わりおおらかな気持ちで進んで自然とかかわりを持てるようになり、自然とのふれあいが楽しめるようになった。

《課題》

- ・森の保育園の活動が、その後の日常生活に連続して位置づけられるように、園内の自然環境も更に魅力あるものにしていきたい。
- ・今後も自然に対する更なる研修の充実を図り、子どもの豊かな心を育みたい。

7 まとめ

日常生活の中で、体験できないことを自然の中で体験することで子どもたちの表情や言動に変化が起きることを見ることができ、自然体験が子どもに与える影響は大きいことを改めて感じた。子どもが自然と出会い、心が動かされていることを見逃さず援助していくことが大切であり、保育者自身の自然に対して感じる力を磨くことにもつながり、環境への意識が醸成される。

これからも、子どもと一緒に自然の大きさ、美しさ、不思議さに直接触れ、保育者も素直に表現し、子どもたちと感動を分かち合う存在としてあり続けたい。

＜参考文献＞

- ・小田豊、湯川秀樹編「保育内容環境」北大路書房 2013
- ・井上美智子、無藤隆、神田浩行「むすんでみよう子どもと自然」北大路書房 2010
- ・厚生労働省編「保育所保育指針解説書」フレーベル館 2008
- ・柴崎正行、若月芳弘編「保育内容環境」ミネルヴァ書房 2012
- ・福元真由美他「事例で学ぶ保育内容<領域>環境」萌文書林 2015